

# 琉球大学学術リポジトリ

宮古島のピンザアブ洞の後期更新世堆積物より発見されたヘビ類化石の分類学的帰属とその歴史生物地理学的意義

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学21世紀プログラム 公開日: 2007-06-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 太田, 英利 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/650">http://hdl.handle.net/20.500.12000/650</a>

PS-22 宮古島のピンザアブ洞の後期更新世堆積物より発見されたヘビ類  
化石の分類学的帰属とその歴史生物地理学的意義  
(Taxonomic status of snake fossils from the Late Pleistocene deposits of the  
Pinzabu Cave, Miyakojima Island, southern Ryukyus, with discussion of their  
historical biogeographical implications)

太田英利 (Hidetoshi Ota)

琉球大学熱帯生物圏研究センター西原研究室

琉球列島の南部に位置する宮古島はそのほぼ全域を石灰岩に覆われた平坦な島で、比較的新しいとされる石灰岩堆積の時期や、ハブ類を欠く特徴的な陸生動物相から、中-後期更新世に陸化したきわめて新しい島であること、現在そこに見られる陸生動物はごく最近の漂着やヒトによる持ち込みに由来するものであることが、長らく信じられてきた。しかしここ数年の分子生物学的手法等を用いた再評価の結果、実際にはこの島に生息する陸生動物の中に、固有の分類群や遺伝的に特化した個体群が少なからず含まれていることが示され、同島の歴史生物地理学的位置づけに対する再検討の必要性が指摘されはじめている。このような問題の検討には、しばしば化石資料が重要な情報を提供する。幸い宮古島には化石を豊富に含む堆積物が点在しており、実際、これまでに多くの哺乳類や爬虫類の化石が発掘され、島そのものやその陸生動物相の形成史の再検討に活用されはじめている。今回の発表では、あらたに宮古島のピンザアブ洞の後期更新世堆積物中より発見されたヘビ類の化石について報告し、その歴史生物地理学的意義について検討してみたい。発見された化石は3点で、それぞれ (1) 右下顎の前部（後端の部分を欠く歯骨と歯骨歯の約半分）、(2) 同じく右下顎の前部（前端の部分を欠く歯骨、歯は大部分が欠落）、および (3) 後端部分を欠く左の翼状骨であった。このうち (1) は前端部の形状や歯の相対的な長さ、メッケル腔前端部の相対的位置などから、現在も宮古島に生息するサキシマスジオ (*Elaphe taeniura schmackeri*) と同定される。これに対し (2)、(3) は、少なくとも全体的な形状からは (1) と同様にナメラ属 (*Elaphe*) ないし近縁の他のナミヘビ科内の属であろうと考えられた。しかしながらこれらの2標本は (1) と違い、サキシマスジオを含む国産のどの種とも異なっていた。このような結果は、後期更新世の時点で宮古島に、現生種であるサキシマスジオに加え、少なくとも現在では国内には見られないナミヘビ科の1種が分布していたこと、この種は後期更新世以降の短い間に同島から姿を消してしまったことを示している。以上の結果は宮古島の陸生動物相の特異性、そして後期更新世以降に同島で生じた陸生動物の大量絶滅をさらに際立たせ、同島の陸生動物相が近年の漂着や人為的な移入を通して形成されたとする仮説へのさらなる反証となろう。ただしその一方で、宮古島を覆っている石灰岩の歴史が新しいことも否定出来ず、したがってこれらを総合すると、宮古島やその周辺エリアについて、きわめて特殊な想定を含む仮説を立てざるを得ないであろう。